第 13 回全国医学部国際交流協議会開催に当たって

第 13 回全国医学部国際交流協議会　会長
京都府立医科大学脳神経内科学教授
国際学術交流センター長
水野敏樹

今回全国医学部国際交流協議会の開催を担当させて頂くことになりました。コロナ禍の収束がなかなか見えない中、ようやく海外との往来が可能になりつつあり、国際交流再開に向けて、「**学生を国際交流へ導くには？**」をテーマに皆さんと話し合える機会を企画致しました。

海外留学は短い期間であっても自分の学生時代の中で大きな冒険でした。全く日常とは異なる環境に身をおいて、自分の言葉の不自由さをもどかしく思いながら、新しい友人を作り、一緒に学び、遊んだ経験は、これまでの自分の殻をやぶって見えてくる全く新しい刺激的な世界でした。私が国際交流を担当してからいつも考えていたのは、感受性が豊かな学生時代にできるだけ多くの学生に同じような経験をして欲しいとの思いです。これを具体化するため、学年の 20%を海外実習へ送り出すことを本学国際交流に関する目標とし、留学希望者を募ってきました。語学能力の高低はあるにせよ、その留学枠を用意することでそれを上廻る学生が応募してくれたことに高い学生の意欲を感じました。一方残りの 8 割弱の学生にはやはり留学は遠い話です。その原因は語学能力に自信がない、資金がない、時間がない、学内の試験や国家試験の方が気になるなど様々要因が考えられます。英語の reading に関しては十分すぎる学力を持っているにも関わらず、listening、speaking に関する語学能力はやはり大きな問題で、多くの学生が海外へ行くことを躊躇する大きな要因となっています。何とかこの壁を打ち破れないかと、国際医療福祉大学の押味先生には本学の国際医学英語のカリキュラム改革にも加わって頂き、学生の苦手意識の払拭を図っております。その間の議論で押味先生には様々な御示唆を頂きましたので、是非皆さんと共有できればと思います。

海外へ学生を送り出す一方、相互交流により海外の学生を学内へ受け入れることも進みました。この効果は学内を国際化する上で大変効果的です。実際留学生を受け入れている時には私も英語で臨床実習を行い、海外からの先生が共同研究で来られた時には回診も英語で行ってきました。そしてやってみると躊躇していた学生や研修医がしっかり英語でプレゼンテーションができるのです。海外へ行った時と同様に無理やりでも英語を話させると、学生の潜在能力は十分あり、私達はそれを引き出せていないだけではないかと思うこともあります。新型コロナウィルス感染はこれまでの国際交流を難しくする一方、インターネット環境の普及により、オンラインによる共同授業や学生同士がグループ discussion することも可能になってきています。海外まで出かけるのは大変だと思っている学生にもキ

ャンパス内で留学生との交流やオンラインでの交流により海外の学生と交流を進める方法についても話し合えればと思います。4 月に香川大学インターナショナルオフィス　留学生センター長の Lrong 先生達とクリーンアップイベントを共催させて頂きました。瀬戸内の庵治町 鎌野海水浴場と京都の鴨川をそれぞれが留学生と共に清掃活動をするというゴミ問題を考える企画で、若者の世代に共通する環境問題を留学生と共に議論することができました。コロナ前は食事をしながら話をするのが最も一般的な国際交流の方法だったのですが、with コロナの時代食事なしにどのような留学生との交流ができるかについても話し合えればと思います。是非多くの国際交流に関わる方々にお集まり頂ければと思います。京都で皆様をお待ちしております。